



いましたし、学校からの手紙も読むことさえ拒否していました。

母は怒る時は感情的にかつ

「母が亡くなったのですが、悲しくないんです」「ずっと、父より母が先に死んでくれた方がいいと思っていた：その通りになり：」と何故か

と、父より母が先に死んでくれた方がいいと思っていた：その通りになり：」と何故か

か苦しくて我慢できず吐き出したのは、母が亡くなって二週間後のエンカウターでした。自分から母の話をしたのはこの時が初めてでした。母

のことは死ぬまで誰にも言えないと決めていました。

私にとって母は十代前半の頃からずっと恥ずかしい人でした。漢字の読み書きができず簡単な計算もできませんでした。それは、戦争という時代背景や貧しい家庭環境で、家事の担い手だったため小学校にも十分に行かせてもらえなかつたからです、これまでに努力しなかつたからだと言っています。私の学校への提出書類は全て父が書いて

母に学校であったことなどを話したりもせず、また、できるだけ母と行動を共にしないようにしていました。しかし、学校の参観は避けられないことの一つでした。身なりを整えて来てくれ

るか、友達のお母さんに変なことを口走らないかとハラハラしていました。高校一年の三者面談中に、「言うことを聞かんかったら、ぶち回してやっってください」と突

然母が言ったことがありました。私は恥ずかしくてただうつむき小さくなっていました。

結婚する時は、これまでに増して母をお荷物だと思いました。相手の親や仲人さん

に合わせたくないのが本心でした。仲人さんと先方の親との会食の数日前、母は腰が悪くて行

けそうにないと言いました。見た目にはさほど悪くなさそうでしたが、「行けない」と言ってくれて、その時は正直ホツとしてい

ました。結婚後、故郷を離れる時、新幹線のホームに家族と友達が見送りに来てくれました。父母妹が泣いている顔が見え

ましたが、さほど寂しくも悲しくありませんでした。しかし、集まってくれた友達と別れることは、泣けて仕方がありませんでした。学校や職場では気の合う友達に会え

ました。いろいろな場面で、苦しかったこと辛かったこと楽しかったこと嬉しかったことを共有し、家とは違う居場所となっていました。一番の

親友には、「この子の為なら死んでもいい」と思えるほどでした。友達は私の支えでし

た。母は脳梗塞になり、まぶたを開け閉めするだけで、話すことも、うなずく事もできず、2年8ヶ月の間寝たきりで過ごし、そのまま意識は戻

ることはありませんでした。しかし母が亡くなって1年が過ぎた頃、何故かエンカウターで母のことを話したくなり

ました。不安はありませんでしたが、話したい、聞いて欲しい、話すとかかわるかも知れないという思いが心の中

に話しました。恥ずかしい母と思ってしまう自分の冷たさや、父より早く死んでくれたらいいのにと願ったことを正直に話せました。母のことに触れると指先が切れてしまい

ような痛みを感じていました。が、実際話すと一緒に溜まっていた母への思いがスーッと引いていくのを感じました。

たくさん聞いてもらい落ち着いた頃に、渡辺先生から「お母さんはそのことをどう思ってたと思う？」と聞かれました。考えたこともありま

せんでした。でも、考えてみると、母こそが自分自身が情けなく思っていただろうし、娘の私に馬鹿にされて悲しかっただろうと思いました。衝

動的な場面でした。これがきっかけで、母に対する思いは一変しました。母の事情や気持ちちは？と思いつく事ができ

るようになりました。あの時、仲人さんと先方の親との会食に腰が悪くて行けな

いいます。あれから、母のことを思い出すことが多くなり、よく記憶の中を探しています。母に

してもらった事、言わなかつたけどたぶん私を思いやってくれた事がぼつぼつ思い出されてきます。私が母に言

ったこと、やっつたことを思い出すとひどい事したと「お母さんごめん」と謝りたい気持ちになります。母への思いが愛情になり、今もじわじわ増

えています。誰にも話さないと決めてずっと触れないようにしてきましたが、今では話せない母と思わなくなりまし

た。こんな風に母を見られるようになったことは、私にとって幸せなことだと感じています。傾聴の学びを続けていて

て本当によかったです。(H・K)

母が亡くなってホツとした私

